

<「知るっば!久留米」 令和4年1月20日(木) 12:30~放送分>

おいでよ、地場産くるめ! ~第3回~ 「久留米緋と藍胎漆器」

<ゲスト: 地場産くるめ 業務課課長 益村 千夏さん>

坂本 MC (以下「坂本」)

「知るっば久留米」ナビゲーターの坂本豊信です。

今月は、ぜひ行っていただきたい場所ということで

『おいでよ、地場産くるめ!』をテーマにお送りしています。ゲストはこの方です。

ゲスト: 益村さん(以下「益村」)

こんにちは、地場産くるめの業務課で課長をしている益村千夏です。

よろしくお願いします。

坂本 3回目の今回は、伝統工芸品である『久留米緋と藍胎漆器』というテーマでお送りします。

まずは久留米緋についてのお話をお願いします。

益村 久留米緋は、今から約220年前に井上傳という12才の少女によって考案されました。

それまでは庶民の着物と言えば藍染(あいぞめ)一色の地味なものでしたが、

着古した着物の中に白い模様が所々見えたそうです。

お伝さんはそれを不思議に思い、糸の交差したところが染まらずに白く残ったのではないかと考え、

自分で白い糸を所々くくって染めて、今度はくくっていた糸をほどき、

白いところが柄になるように糸を織ったのが久留米緋の始まりと言われています。

坂本 手間がかかる工程ですね。

久留米緋と言えば昔ながらの井桁(いげた)模様が思い浮かびますが、

どういった特徴がありますか?

益村 緋は当初、藍染の手織りのみでしたが、現在は化学染料や機械織が発達しており、

いろんな色柄をご覧いただけます。

井桁模様の他に、あられ模様、いわゆる水玉模様や縁起のいい亀甲柄、麻の葉模様、

矢緋などさまざまな柄があります。

綿織物なので軽くて丈夫、夏は涼しく、冬は暖かいといった特徴があります。

私も緋をよく着ているんですけど、緋を好きな方は他の人が着ているものにも反応されて、

声を掛けられることが多いですね。

飽きが来ない柄なので、夏は1枚で、冬は重ね着をして1年中着ています。

坂本 私も今日は、緋のネクタイをしてこの放送に臨んでいます。
ラジオなのでね、リスナーの方に見てもらえず申し訳ないんですが、いかがでしょう？

益村 とっても素敵です！いい緋の柄ですね。

坂本 無理やり言わせているような気もしますが。(笑)
実はこちら、地場産くるめで購入しまして、ちょっと良い方の手織りなんです。

益村 見たらわかりますよ。(笑)

坂本 柄は井桁で、本当に緋らしいネクタイなんですよね。
商売柄、広報の仕事をしていますので、いろいろな方とお会いする時に、
「緋のネクタイですか？」等と会話のきっかけにもなりますので、とても重宝しています。
その緋の資料館が地場産くるめにはあるということで、最初の週にもお聞きしましたが、
展示などを行っているんですよね？

益村 久留米市東合川にある地場産くるめの2階に入場無料の久留米緋資料館があり、
昔の作品や緋を作る際に使う道具などを展示しています。
看板に「緋」と書いているんですが、知らない方からは「久留米餅(もち)はどれですか？」
とたずねられることもあります。(笑)
私たちも一瞬ピンとこないんですが、「糸へん」と「食へん」を間違われているんでしょうね。
久留米がグルメに聞こえるようなものですかね。

坂本 緋という文字と餅という文字が似てると言えば似てる、
遠目に見たらそう見えてしまうのかもしれませんがね。
普段使い慣れていない言葉だと勘違いしますよね。他にもエピソードはありますか？

益村 お客様から「カツオ柄ありますか？」と聞かれて、「こちらで魚の販売はしておりませんが…」
と返したのですが、緋の柄でカツオ柄(青とグレーを基調にした縞模様)というのがあって、
知らない人には謎の言葉ですよ。今となっては笑い話です。

坂本 なるほど。楽しい話をありがとうございます。
その点から言ったら、同じ伝統工芸品の籃胎漆器も話題が豊富そうですね。
籃胎漆器についてお話をお願いします。

益村 籃胎漆器は竹を編んだものに漆(うるし)を重ね塗りして、
研ぎ出し石で漆を削ると、下の漆の色味が出てきて模様のように見えます。
お盆や籠(かご)に使われることが多いのですが、最近はインテリアとして飾られることもあります。
ほとんどは実用品として使われますが、軽くて丈夫で壊れても修理して長年使えるので、

環境にも優しい製品ですね。

坂本 以前は、結婚式の引き出物や記念品に藍胎漆器が入っていて、
久留米のどの家庭にも2~3個はありましたよね。
私も30年前、披露宴の引き出物に藍胎漆器を使わせていただきました。
でも最近は、あまり見かけなくなりましたね。

益村 ありがとうございます。
丈夫で長持ちするのはいいんですけど、長く使えるだけに、
新しく購入していただく機会が減るのは、商売としては微妙ですよ。
ちなみに、当初は天然の漆しかありませんでしたが、
現在は漆に代わる油性漆塗料やポリウレタンを使用されることがほとんどです。
緋と同様、時代の流れとともに材料も変わりますが、技術は受け継いでいってほしいところです。
そのうち幻の工芸品にならないように、地元の皆さんにも末永くご愛用いただきたいですね。
昔ながらの藍胎漆器といえば、お盆や茶筒、お菓子を入れる菓子器などが多いのですが、
最近では、フランスパンを乗せるのにちょうどいい大きさのパン皿や
ランディッシュという洋風なお皿もあります。
色も以前は茶色や黒だったものが、今は赤や白などおしゃれな色が使われています。
東京オリンピック・パラリンピックの記念グッズにも採用していただきました。
地場産くるめの展示即売所で、ぜひ実物をご覧くださいと思います。

坂本 今では国際的な記念品になったということですね。
新しい使い方、新しい商品を私も拝見して、ぜひ使ってみたいなと思いますね。
昔の結婚式の披露宴の引き出物と一緒に並べて使うと、
新旧の比較ができて面白いのではないかと思います。
地場産くるめの益村さん、興味深いお話をありがとうございました。
地場産くるめの場所やお得な情報について、
詳しくは「地場産くるめ」で検索して、ホームページをご覧ください。
次回は『おすすめの特産品』をテーマにお聞きします。お楽しみに。